◀▼9月21日に日本語教室「にほんご・あいnet」が開催した、フィリピンをテーマとした国際交流パーティーの様子。日本人・フィリピン人のほか、中国・モンゴルなど多国籍の方がフィリピンの料理と文化に触れながら交流を深めました。

多文化共生 たぶんかきょうせい

“国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと”（総務省）

増え続ける外国人人口

近年、まちなかで外国人を見かけることが多くなったと感じる方は多いのではないでしょうか。日本を訪れる外国人は年々増加傾向にあり、出入国在留管理庁によれば、日本に在留する外国人は令和5年末時点で340万人を超え、過去最多を更新しました。

外国人の増加は本市も例外ではなく、コロナ禍を除けば、近年その数は増加の一途を辿っており、現在全市民に占める外国人の割合は約3%に迫ります。10年前と比較すると、その人口は約2倍に伸びているのです。（令和6年10月1日現在4322人）【図1】

私たちのまちはいま

一方、減り続ける日本人人口

国立社会保障・人口問題研究所が令和5年4月に公表した「日本の将来推計人口（令和5年推計）」によれば、今後50年、日本人の人口は減少し続けると予測されています。本市の人口も、平成17年をピークに緩やかな減少が続いており、今後もこの傾向は続く見込みです。

日本全体で少子高齢化が進み、産業によっては働き手不足が深刻化する中、国は外国人労働者の受け入れ拡大に向けた動きを進めています。今後、国内の外国人人口は現在の倍以上に上昇し、2070年には全人口における割合が10%を超えると予測されています。【図2】

図1 市内外国人の人口・割合推移

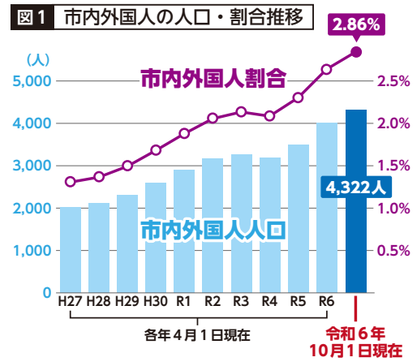
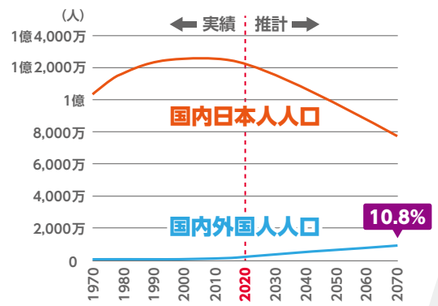


図2 国内日本人・外国人の人口推移



出典：国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（令和5年推計）」日本人人口と外国人人口の推移（出生中位（死亡中位）推計）

市内の国籍別外国人数 上位6カ国（令和6年10月1日現在）

①ベトナム	901人	④ブラジル	336人
②フィリピン	644人	⑤ネパール	318人
③中国	559人	⑥ミャンマー	250人

市内では、ベトナムをはじめとする東南アジアからの外国人が多い傾向にあります。ベトナムでは、技能実習生などが就労のために日本に在留する方が多いと見られています。

※講師は（公財）埼玉県国際交流協会から派遣

国際交流パーティーには、フィリピンにルーツのある方や日本・フィリピンの国際結婚夫婦、国際交流に関心のある方などが参加。フィリピン料理を囲みながら、フィリピンの生活・文化を学び、伝統衣装の試着やバンブーダンスを楽しみました。参加者からは「国が違ってもすぐ親しくなれて楽しかった」などの声が寄せられました。

ともに地域をつくり、支える

市内においても今後ますます外国人の増加が見込まれる中、必要とされる考え方が「多文化共生」です。この言葉は、文化的背景の異なる者同士が互いを理解し合い、同じ地域でともに生きていくことを指します。人口減少による地域活動の担い手不足にも直面する中で、これから外国人は私たち日本人と同じように産業を支える働き手として、また地域社会の担い手として、活躍することが期待されています。

そのためにも、私たちがお互いを受け入れ、地域でともに生きること―多文化共生社会を実現することは、これからのまちづくりにおける重要な課題となっています。

多文化共生の時代へ

まずはお互いを知ることから

皆さんは普段、外国人と話す機会はあるでしょうか。言葉が通じないかもしれない、考え方が違うかもしれない…。外国人に対して苦手意識を持っている方は多いかもしれません。しかし、日本にいる外国人も、慣れない土地・文化・言葉に戸惑い、不安を抱えながら過ごしている方がたくさんいるでしょう。実は話してみるとすぐ仲良くなれるのに、相手を知らないために、すれ違いを起こしていることもあるかもしれません。

お互いを理解するには、まずお互いを知ることから。久喜市には実際どんな外国人や、外国にルーツのある方が暮らし、日本人とどのような関係性を築いているのでしょうか。

今月の特集は、久喜市における多文化共生の「いま」を紹介するとともに、このまちで手を取り合って歩む「これから」の多文化共生について考えます。

多言語による情報提供を行っています

カタログポケット（10言語対応）

広報くき

防災ハザードマップ

保健事業日程表

ごみ分別収集表
（6言語対応）